

廓のおんな

井上雪



井上 雪 (いのうえ ゆき)

1931年(昭和6)、金沢に生まれる。金沢女子専門学校卒。俳人。『北陸の女たち』『金沢の四季』などのエッセーがある。本書により昭和56年度大宅壮一ノンフィクション賞佳作。

廓のおんな

朝日文庫

昭和59年9月20日 第1刷発行

定価400円

著 者 井 上 雪

発 行 者 初 山 有 恒

印刷製本 凸版印刷株式会社

発 行 所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地5-3-2

電話 03(545)0131 (代表)

編集＝図書編集室 販売＝出版販売部

振替 東京0-1730

©YUKI INOUE 1984 Printed in Japan

ISBN4-02-260290-2

うんな

井 上 雪

朝日文庫

表紙・扉 伊藤 鑛治

目次

雛妓の頃……………7

梅ノ橋 8

姉妹のこと 17

たあほの頃 40

振袖芸者 57

ロシア俘虜と廓 74

水揚げの口 90

芸者の頃……………107

芸のこと 108

廓遊びの四季 127

観音町くらし 155

愛人とともに 173

女将の頃……………201

「すず見」のあるじに……………202

芸者をそだてる……………219

戦争のあとさき……………230

戦後の廓……………241

おんなふたり……………249

解説（川口久雄）……………268

廓のおんな

雛妓の頃

梅ノ橋

加賀の金沢には、いくつかの遊廓があった。

そのなかでも、京の祇園にくらべられるのが、「東の廓」である。

金沢の市中には、二つの川が流れている。南部を流れる犀川と、北部を流れる浅野川で、どちらもゆるやかに日本海にそそぐ。

東の廓のわきを流れる浅野川には、むかし梅ノ橋という橋がかけられていた。廓の客の一人が言い出してかけた、廓へのかよい橋である。街の雑踏とは無縁な、廓がよいに便利な花道がほしかったのだ。

馴染みの芸者をつれて、酔いのこの顔を川風にさらそうという粹狂な木の橋なのだ。その遊客の名は、才田幸次郎という。

梅ノ橋は戦後の洪水で流失したままになっていたが、二十五年ぶりでかけなおされた。昭和五十三年四月十六日のことである。

渡り初めの日、私は東の廓の置屋「すず見」の女将と橋をわたった。八十六歳の山口きぬさんは足もとが危うい。私は抱きかかえるようにして、ゆっくりと歩いた。きぬさんの髪型はいつもきまつている。潔癖なまでにきりつと結びあげられた袱紗だたみである。その白髪に、大粒の翡翠の髪かざりがまぶしい。

きぬさんと川をのぞいた。雪解けの川は、おびただしい桜の花びらをのせて流れている。花びらは、川の右岸の桜並木から風に舞ってくるのだ。橋の木の香がただようあたり一面に、巨大なくす玉が割られたあとの紙きれが散らばっている。渡り初めがすんだ梅ノ橋には、そんな紙きれと落花が吹きよせられていた。

きぬさんは姿勢がよい。しゃっきりと背筋がのびている。折からの強い風にくずれそうな恰好で、反り身に川上をながめていたのだが、ふと踏みこんだ。橋桁に添う、多彩な花びらの筋に気づいたからだ。

「ありまあー、まっで、友禅の細ぐりみたいやがいね、うつくっしゃ……」

私は、しばらく黙っていた。生きた花びらと造花の紙きれとで、これ以上たくみに繕うことができないほどに作りだされたものを、きぬさんは、着物の腰紐にみてとったのである。

眼の前に、うなじが見えた。ほそく、ながい襟足であった。きぬさんは、ひとすじの髪のみだれも恥とする歳月を生きてきた。その髪が、いま、川風に吹かれている。私は、そっと髪に触れた。思いがけないほど硬い手ざわりだった。深くぬいた衣紋のなかに、白く乾いた

頸すじが石像のようにさえ見える。焦茶と白の棒縞の着物にあわせられた半襟の下に、幾すじもの皺が刻まれていた。

梅ノ橋が最初にかけられたのは明治四十三年六月二十八日である。きぬは、その日のことをいまでもよくおぼえている。

「あんときの空模様のことまで、しっかつと覚えとりみす。いまにも雨が落ちそうな梅雨じぶんでねえ。じよんに持ちこたえとりみした、お天氣が。川岸に、伏見亭という待合所がありみして、お祝の大砲がドドン、ドドンと鳴ったりみした。そのころに繁盛しとった友田呉服店の、紋羽二重の紅白の幕をくぐってからに、偉いお人さんの顔がずらっと並んみした。

渡り初めが済んだあと、演舞場でお祝の宴会があつたがですけどか、これがまた大騒動の賑わしきやつた。なんせ、夜通しやつたもんねえ。一番の出しもんな三番叟で、踊り方は籤引きでございんしてね。わたしや籤にはずれたけどか、大の仲好しの鶴子さんが当りみした。その吉力の鶴子さんと、山屋の操さん、美浜の一郎さんの三人で踊りました。みんな二十そこそこで、うつくしこっちゃつた。一番若い鶴子さんが翁を舞うました。真赤な紋羽二重の上に、ぶどう色の絹地に扇面を刺繍した着物を重ねて、袴な松竹梅の模様やつた……。たしか、そうやつた。ほの時分のわたしや、十八やつたこと」

いまからおよそ七十年ほど前の話である。東の廓の演舞場は、桜並木のなかほどに、川を

前にして建っていた。梅ノ橋が完成する前の年に、以前からあった建物を改装して開かれたのだ。今はもうその建物はないが、場所は現在の吉池病院の左隣であった。

ここから上流にも橋がいくつかある。すぐ川上の天神橋から、常盤橋、鈴見橋の順である。梅ノ橋のすぐ下^{しも}にあつて「とどろきの橋」とよばれた浅野川大橋は、北国街道を北から城下にはいるときの道すじだった。藩政期から明治初年にかけて、百万石城下町の繁華街としてだけではなく、加賀から越中、能登にかけての通行路として、もっとも繁盛したのがこの界限だった。

こうした雑踏をあてこんで、浅野川左岸ぞいには芝居小屋や掛茶屋が軒をつらねていた。きぬが十代のころは、そこに稻荷座があつた。明治三十七年二月に尾山座と名が変わり、昭和に入つて尾山倶楽部、さらに戦後は北国第一劇場となつている。稻荷座の左右には引手茶屋がもうけられていた。廓のお茶屋が出張して座布団や煙草盆を出し、芸者たちが控えた。

廓あそびに飽いた遊客たちは、最頂の芸者たちに酌をさせ、ご馳走を食べながら芝居を見物する。きぬもよく相手をさせられた。芝居は長くて、なかなか食事をするひまもない。芸者は客の前で決して食べ物を口にしてはならなかったのである。カタカタ、カタカタと橋を鳴らしながら、置屋の使い走りの者が運んでくれる弁当が待ち遠しかった。きぬは僅かの時間を見つけ、物蔭でつめたい弁当に顔をつっこみ、ただ急いで咽喉におした。そんな引手茶屋は、二軒や三軒ではなかったのである。

引手茶屋の名残りのように現在も、川べりには昔からの料亭や貸座敷業の店がいくつか並んでいる。川と卯辰山を借景にとりいれたそれらの家は、総じて家並みが低く、よく拭きこまれた戸口をつらねている。

戸口はたいてい格子戸である。家の前は、夏ならばいていねいに打ち水され、冬ならば粉雪を掃いた箒目の跡もくつきりとみえる。

浅野川べりには緑が多い。それは川面まで卯辰山が迫っているからだ。

山といっても標高百四十一メートルの卯辰山のような小さい山が、金沢の町には他にまだ二つある。金沢の町なかを平行に流れる犀川と浅野川はそれぞれ外側に小さな山をもち、さらに二つの川の間にもうひとつ丘陵がある。三つの山の一つは市の東南にある野田山だ。旧藩主前田家累代の広大な墓所を山頂に、作家室生犀星をはじめ二万基ほどの墓がある。雑木と野鳥につつまれた山裾は、その名のとおり寺院が密集する寺町台につづく。川の流れに平行した寺町通りからは、枝のように分れたいくつかの急な坂が犀川へと通じている。

次は、寺町台との間に犀川をはさんでのびる小立野台である。前田家の庭園であった兼六園を経て、現在は金沢大学になっている森、かつての金沢城へとつながっている。

そして三つ目が、この浅野川のほとりの卯辰山なのだ。三つの山のなかでも殊に緑がふかい。龍が伏したような恰好から臥龍山、あるいは向山、夢香山、また京都の東山に形が似て

いて、市の東部にあるから東山などといわれる。

戦火を浴びていない金沢の町並みは、城下町の面影を現在もかなり残しているが、この東山一帯の小路はことに念がいつている。せまい袋小路や丁字路、鉤形路で形づくられているのが東の廓なのである。迷路そのものの廓町からは三絃の音が洩れきこえてくるし、ここからかなり離れた長町、本多町などの旧武家屋敷では、厚い土塀の奥から、琴や加賀宝生の謡がきこえてくる。

かつて、豊臣恩顧の武将であつた前田利家を藩祖にあおぐ加賀藩は、江戸の開幕前後からお家の安泰を第一に、ひたすら徳川家には恭順の意を示し、その証しとして、武辺の充実や蓄財のことよりも、どちらかといえば芸文、工芸の奨励に力をそそいだ。つまり、財政の安定を無視して多大な富を文化面に投ずることとなつた。北陸にあつて、芸をぎりぎりの純粹なものにまで追求しようとする金沢の文化が実を結ぶ一つのきっかけが、そこにあつた。

そんな気風は、いうまでもなく廓の内にも浸透したに違いない。いっぽう、藩財政の逼迫からお召米という減俸がたたつて武士階級の一部が没落し、その娘が廓に身を寄せるようになり、いきおい他より格式を重んずるという気風が、東の廓に芽ばえてくるのである。

浅野川の左岸には、上流の天神橋から梅ノ橋にかけて、右岸の桜ときそうように松並木がつづく。松並木は川の堤防補強のため、三代藩主・前田利常が土堤に植えさせたものである。ほっそりとした形のよい黒松だ。

その並木のほとりには、泉鏡花の『義血俠血』の舞台となった場所を示す『滝の白糸』の石碑が建てられている。碑のうしろの浅瀬では、いまでも、時には友禅流しを眺めることができる。

川上の雪嶺は、戸室山と医王山である。金沢の町は、どこからでも山が眺められる。どんな下町の通りからも、裏通りからも山がみえる。山は一年のうち半分くらいは雪をかむっている。桜のころの浅野川は、そんな雪解け水のあつまりなのだ。

「見まっしま。きょうの向山な優しげな。お花のせいやろか。山な、白うみえる」

きぬは、向山にむかって背筋を伸ばした。

「いつのまにやら、山の麓のぬしになってしもてからに。ぐるりじゅうの者な亡^{もん}うな^のってしもて。ほんまに独りぼっちに残されてしもた。お父っあんも、おっ母さんも、弟も、妹も、おあねさんも、友達も、みいんな逝^しってしもた。

ほんで寂しゅうな^なったさな、川べりの散歩にくるがや。芝居小屋やら演舞場やら、なつかしとこやさけねえ、ここな。向山に桜が咲いた、向山が紅葉^{もみじ}した、うつくしちゅうて、ぞうろぞうろと、お客さんに連^つんだってよう来^きみした。

昔な、毎日のように友禅流しがあつたもんや。ちんちやい時から着物ながめることが好きで。友禅流し見とったさな、まあっで反物の品定めしとるような気持になつてねえ」

梅ノ橋をわたってから東の廓まで、歩けば数分なのだ。その通りは、以前はほとんど妾宅であった。道は細い。上背のあるきぬは、ぺたぺたとつんのめるように歩く。土塀からかぶさって茂る柿の若葉が頭に触れる。柘榴の木がある。枇杷や杏の木もある。塀の奥からは、三味線や笛の音が洩れてくる。道は、観音院に通じる観音町を二、三步で横切る恰好になる。すれちがった女の髪から鬢付油が匂い、お白粉の残り香がただよったりする。

そこはもう、東の廓の表通りになる。

よく磨きこまれた紅殻格子の、どれもが同じ家造りの置屋が両側につづく。白地にはそく墨色で「ひがし」と書かれた軒燈がつらなり、脇にそれぞれの置屋の屋号がよめる。門口には、太字で屋号が書かれた番傘がいくつも重なりあつて干されている。下を出格子とし、思いきり背が高く、奥行の深い廓独特の二階造りの置屋が、二十一軒のこっている。

出格子は、格子のすき間が極端に狭い。「きもすこ」とよぶ。「すもすこ」というのもあるのだが、それは竹製である。東の廓は、すべて「きもすこ」である。

きもすこが、紅殻色に塗られている。

紅の色は、よほど歳月を重ねたらしく華やぎはみじんも感じられない。それどころか、むしろ無彩色にも近い洗われきった色として、しんと居坐っている。ひよっとすると、この紅の色は、廓という環境のなかでこそ、本来の紅の深さを発揮したのかもしれない。

「紅殻」は、インドのベンガルに産した着色料からの顔料である。この格子の色は、金沢の